

は、帝国の制度史と帝国の社会史・文化史、さらには学際的な交流が必要だ。なぜなら、20世紀の帝国を問うことは、帝国が作り出し・普及した知の境界と通念自体を問うことも含むからだ。『オックスフォード帝国史』には「複数の限界」があることを認識し、ポスト・コロニアル研究と帝国史研究の生産的な対話がなされるべきであろう（D・ケネディ）。ポスト・コロニアルであっても、ポスト・インペリアルではない今日、それ抜きに20世紀のイギリス帝国を語れるとは思われない。

最後に、イギリス帝国をグローバルな視点から見る必要があるのではないかと。とりわけ、第一次世界大戦に行き着く緊張した国際関係の中に英帝国を置いてみる必要がある。この本では帝国の自己完結性と内部調整力が浮かび上がる。いわば内向きの視線が強いように読める。イギリス帝国と「他者」の双方向的な関係がもっと重視されているのではないかと（逆の視線から英帝国を扱う小林論文の成果を生かすためにも）。英帝国は、当時のグローバルな文脈の中で、他の帝国をどんな「他者」と認識し、どのような関係を結んだのか。またその反射としてどのような自画像を再構築したのか。それがなぜ大戦にいたったのか。本書はどちらかという連続説の立場が強いように思われるが、「戦争と革命の世紀」の開始期、大戦の必然性や歴史的画期性（諸帝国の解体と社会主義の登場など）が視野に入れられるべきではないだろうか。吉岡も、ホブズボームも「帝国の時代」は「平和から戦争へ」で終わっている。大戦を歴史の要素とせず、世界史叙述的方法的な画期とするこの問題は、すでに論じ尽くされた「古い」問題なのだろうか。

20世紀のイギリス帝国史を書くことは、極めて大きな現実的かつ知的緊張を強いる。しかもそれを衰退の歴史として描かないとしたらなおさらそう。なぜなら「帝国」は終わっていないからだ。そのためにも帝国の歴史研究は帝国論再隆盛の光と影を常に意識しておかなばならない。L・コリーは「長期の比較史という要素を実践に移すこと、また多元的な関係性に敏感であることが必須である」という視点から、「帝国史は欠かすことはできないものである」と語る。評者はこの意味を重く受け止めたいし、同時に日本のイギリス帝国史研究が時空上の「他者」感覚を欠落したものにならないことを期待したい。そこから、同じく帝国の重い過去と現実に向かい続けなければならないわれわれが、イギリス帝国の歴史を問う意味と「豊かな可能性」が見え

てくるであろう。

（ミネルヴァ書房、2004年12月、XV+367+4頁、3,990円）

アルフレッド・W・クロスビー
（西村秀一訳）

『史上最悪のインフルエンザ —忘れられたパンデミック—』

鈴木晃仁

I had a little bird.
And its name was Enza.
I opened the window.
And in-flew-Enza.

（インフルエンザ流行下のアメリカの子供たちの戯れ歌）

社会経済史の研究者の多くは、第一次世界大戦の末期にインフルエンザが大流行したことを耳にしたことがあるだろう。しかし、その実態についてなにがしかの知識を持っているものは多くないだろう。このことは、必ずしも歴史家たちの怠慢とばかりはいえない。この大流行はヨーロッパでもアメリカでも、「忘れられて」きたからである。1918年の春から19年にかけて全世界で3000万人以上の死者を出した史上最大の流行病であり、第一次世界大戦における戦死者の合計よりも多くの犠牲者を出したにもかかわらず、この疫病は形を成して記憶にとどめられることがなかった。同時期の大戦戦没者の名前が記念碑に刻まれ、同じように大規模な疫病であった中世の黒死病が、「ペスト塔」の建立を通じて記憶されたのとは対照的である。1918～19年のインフルエンザは、家族を失った個人の記憶の中に分散したままであり、流行が過ぎ去ると、公的な世界の記録をつけるものたちはそれを振り返ろうともしなかった。誰もが憶えているのに、その事件が公けに語ることがない不思議な忘却が長く続いていた。

その忘却の状況を変え始めたのが、本訳書の原著初版 *Epidemic and peace, 1918* (1976) である。アメリカにおける1918～19年のインフルエンザの流行の状況をつぶさに研究し、クロスビーのトレードマークである流麗な筆でつづった本書は、出版されてすぐに医者や医学史家・歴史家たちの高い評価を得て、インフルエンザ大流行の歴史研究を刺激する

大きな役割を果たした。ここまでは、新しい主題を発掘した優れた研究書がたどる普通の道である。しかし本書は、その後に激変した世界の疾病の状況に対応して、著者自身も当初は予想していなかった運命をたどることになる。1970年代後半から始まって世界に広がったAIDSのパンデミーが与えた衝撃に対応して、本書は1989年に*America's forgotten pandemic*と改題されてケンブリッジ大学出版局から出版された。そして、2003年にケンブリッジ第二版が出版された時には、当初はインフルエンザではないかと疑われたSARSが惹き起したパニックが世界を襲っていた(本訳書はケンブリッジ第一版の翻訳であるが、「日本語版への序文」はケンブリッジ第二版の序文と内容は重なっている)。本書の出版・改版の過程には、この30年の現代世界の疾病をめぐる激動が刻み込まれている。感染症は克服されたと信じられていた時代から、性感染症の急速な蔓延を経て、インフルエンザと類似の呼吸器性感染症が世界を脅かす時代へと急速に移り変わっていくにつれて、本書が扱った1918~19年のインフルエンザ大流行も、忘れられた事件を発掘する学問的な興味対象から、文明への切実な脅威の^{オームン}前兆へと変貌していったのである。「全ての歴史は現代史である」という言葉が、これほど皮肉な仕方であてはまる医学史の書物は他に見当たらない。

本書は、流行病の歴史研究の難しさと可能性の双方を鮮明に浮き彫りにしている。一言でいうと、「ごく短い期間に世界中を駆け巡って終焉した現象をどのような手法で研究すればよいのだろうか?」という問題である。空間的には研究対象を限定し、一方で時間的に長いタイムスパンを取って変化を検証するという歴史研究の主流である方法⁽¹⁾は、インフルエンザの流行を扱うのに適していない。実質数ヶ月で完結した一度きりの現象を記述するという、歴史学研究の中ではやや異質な手法をとらざるを得ない。一方で、空間的な広がりという点では、1918~19年のインフルエンザは、ほぼ全世界に広がり、10年後の大恐慌よりもはるかに広範な地域に伝播した。そして、「爆発的に世界に拡散した」ということこそ、この流行の本質的な特徴であった。きわめて短期間に国境を越えて世界に広がった現象を記述するというのは、言語の問題一つをとっても疾病史の研究者の多くにとって大きな挑戦であろう。クロスビーの書物は、アメリカの東海岸と西海岸、ヨーロッパ戦線におけるアメリカ軍、サモアとアラスカの詳しい記述を含み、空間的なカバレッジの点で

は、1976年の時点での最善を尽くしていると言ってよい。この仕事を一つの布石にして、広範な地域への疾病の伝播を空間的に把握するダイナミックな枠組みが、1990年代からPeter Haggett, Andrew Cliffといったケンブリッジの疾病地理学者たちによって創造されていくことになる。

クロスビーの書物が潜在的に提示するもう一つの歴史学への挑戦とは、いわゆる環境史や生物学的歴史(biological history)の視点である。この視点はクロスビー自身の後の著作である*Ecological imperialism*(邦訳『ヨーロッパ帝国主義の謎』岩波書店, 1998年)の中で全面的に展開されるが、本書においても、後に生物学的歴史の旗手になる論客の若き日の姿が随所に感じられる。本書が発表された後のインフルエンザ学の発展のおかげで、現在ではインフルエンザの生物学的歴史・環境史を切り開く準備は整っている。1918年の時点で保存された研究室の組織標本や永久凍土に埋葬された遺体などからウイルスを採取して、パンデミックのインフルエンザのウイルス株の特徴が判明し、近年のウイルスの突然変異についての研究の成果とつきあわせられている。また、生態学的な視点からも重要な成果が挙げられている。例えば中国の青海湖に集結した後にユーラシア大陸の各地に散っていく200種近い渡り鳥の役割や、ニワトリやアヒルなどの家禽の役割の研究も進められている。自然と農業が作り出す環境の中でウイルスが突然変異し大流行を生み出すという、まさしくクロスビー自身が後に『ヨーロッパ帝国主義の謎』で展開した壮大な視角を使って、1918~19年のインフルエンザが再訪される機は熟している。

本書の中心はしかし、クロスビーの^{おはこ}十八番である先端的な生物学的歴史の方法よりも、インフルエンザの大流行に対する人間社会の対応のほうにある。その中で特に注目すべき、そして広がりを持った洞察は、社会的な結合と流行病の関係である。疫病は単に多くの犠牲者を出すというだけでなく、社会的結合のあり方を大きく変えることはしばしば観察されてきた。病者の看護という基本的な社会関係はしばしば放棄され、人々は流行地から大挙して逃げ出し、社会は機能を停止する。黒死病に襲われた中世から近代初頭のヨーロッパの都市はもとより、1832年においてさえ、コレラ流行時のニューヨークでは住民の逃散現象が見られた。しかし、インフルエンザに襲われたアメリカの都市では、むしろ社会的な結合は強化されたとクロスビーは主張する。最終局

面に入っていた第一次世界大戦が生み出した強烈な愛国心を背景にして、連邦政府や市当局はもとより、市民もインフルエンザとの戦いに熱烈に参加した。平時の医療の処理能力をはるかに超える死者・病人の大量発生に対処するために、7万人を超える医者たちが医療奉仕隊に参加し、女性たちは進んで危険な看護の仕事のヴォランティアに身を投じ、自動車会社は救急車用の車両を提供した。公権力と民間、医療専門職と素人の区別を超えて、流行病に対する総動員体制が発生したのである。戦争で培われた国民的な団結心の強さは、アメリカ社会がインフルエンザを乗り切れることを可能にしたとクロスビーは言う。書評者にはこの主張の当否を判断することはできないが、戦時の社会の研究者だけでなく、流行病と社会的結合を論ずる研究者が正面から取り組まなければならない重要な指摘であることは間違いない。

疾病と社会的凝集性の問題と並んで、クロスビーの記述の一つの柱である軍隊が流行病伝播に果たす役割も、これからの疾病史研究の中で一つの焦点になるポイントである。日本での研究者は少ないが、軍陣衛生は近代化のパラドックスがもっとも鮮明に現れるテーマである。軍隊は、多数の罹患可能者を長期間にわたって密集して生活させ、しかも広範な地域を移動するので、ヒトのポピュレーションの中では病原体の伝播に最も好都合な集団である。軍隊が感染症を広めた例は、15世紀から16世紀のヨーロッパの梅毒、ナポレオンのフランス遠征のトラコーマ、西南戦争・日清戦争のコレラなど、枚挙に暇がない。一方で、軍隊の兵営というのは、18世紀末以来、国家による衛生状態の改善が執拗に、そして最も重点的に試みられた場所であった。そのような歴史を踏まえると、1918～19年のインフルエンザは、新たな意味を帯びてくる。第一次大戦当時のアメリカ軍は、性病や腸チフスなどの感染症のコントロールにはかなりの成功を収めていたが、インフルエンザの前にはなす術もなかった。それどころか、1918年にヨーロッパにウイルスをもたらしたのも、(おそらく)ヨーロッパで変異して激化したウイルスを18年の秋にアメリカ本土に持ち帰ったのもアメリカの軍隊である。クロスビーの書物は、20世紀初頭の軍隊が、いかに近代化されたとはいえ、疾病の運び手としての太古からの宿命的人格を変えていないことを思い知らせてくれる。近代医学と衛生学の「勝利」は、流行病の長い歴史を貫いて役割を果たしてきた軍隊と戦争というプレーヤ

ーを消し去ってはいない。

近代的な軍隊は安全であるという神話と同じように、近代的な病院は安全であるという神話も、近年のパンデミーの脅威のなかで揺らいでいる。アフリカ起源の出血熱やSARSの流行、あるいは相次ぐ院内感染の事例が明らかにしたように、病院や医学研究所などの医学施設は、いかに近代化されたとはいえ、現代でも疾病伝播の起点になっている。細菌学者のルネ・デュボスが半世紀前に説いた「完全な健康というのは幻想である」という洞察が最も皮肉にあてはまるのは、現代の軍隊であり病院であるのかもしれない。軍隊や病院などの組織も含めて、現代の医療と社会と世界の構造が、感染症に対してどのような脆さを潜ませているのかという問題は、これからますます医学者と人文社会学者が共同して研究する問題になっていくだろう。そして、そのような議論の中で、クロスビーの書物は古典的な地位を占め続けるだろう。少なくとも近年のウイルス学者が語るところによれば、1918～19年のインフルエンザ流行を、私たちが安心して「忘れる」ことができる日は、当分は来そうにない。

注(1) Terence Ranger, 'A historian's forward', in Howard Phillips and David Killingray (eds), *The Spanish Influenza of 1918-19* (London: Routledge, 2003), p. xx.

(2) Jonathan Watts, 'Avian Flu casts shadow over beauty of China's bird lake', *The Guardian*, Monday August 1, 2005.

(みすず書房, 2004年1月, 420+iv頁, 3,990円)